

書評

笠井亮平『完全版 インパールの戦い』

Kasai Ryouhei, *The Battle of Imphal (Complete Version)*

久野 潤 (日本経済大学准教授)

KUNO Jun

著者の笠井亮平氏は、在インド、中国、パキスタンの日本大使館で外務省専門調査員としての勤務経験ももつ研究者で、日印関係史、南アジアの国際関係、インド・パキスタンの政治を専門としている。令和3年に刊行され、話題となった『インパールの戦い—ほんとうに「愚戦」だったのか—』に、イギリス軍が収集した日本軍将兵の日記や手記を新たに加味したのが本書である。

インパール作戦については周知の通り、作戦の戦略面のみならず、実行部隊であった第一五軍の牟田口廉也司令官の人格、そして牟田口の「作戦強行」を許したとされる上位組織の緬甸方面軍・南方軍、さらに大本營の意思決定過程に対しても、厳しい批判が加え続けられている。

この一年で発刊された関連書籍を紐解くだけでも、たとえば、インパール作戦参加者を自ら取材した保阪正康は、

「私は断言するが、インパール作戦の生存兵士は、「牟田口廉也」という名を聞いただけで人格が一変する。それほど憎しみをもっている。「無謀な作戦」「補給なき闘い」「一高級軍人の私欲からの作戦」といった歴史的な評価を憤っているのではない。白骨街道を退却する兵士、あるいは飢餓に倒れていく兵士たち、彼らは新しく投入されてきた後続部隊の兵士たちから「牟田口司令官は明妙の司令部で栄華をきわめた生活をしている」と聞かされ、真偽は不明だが、その報は矢のように前線の兵士たちに伝わっていったのである。われわれがこれほど苦勞しているのに、なんとということか、という怒りは消えていない。インパール作戦での日本軍兵士の第一の敵は軍司令官、第二は雨期とマラリアの蚊、第三は飢餓、そして英印軍はやっと四番目だと戦場で話し合ったという生存兵士もいるが、それが現在にもつづいている¹⁾

と論じている。

また、堀本武功はインド通史を扱った研究書中のコラムでインパール作戦を取り上げ、「日本軍内部ではこの作戦の実効性を疑問視する意見が多かったが、牟田口廉也第一五軍司令官の下で四四年（評者註：1944年）三月から作戦が強行された²⁾」「ボースは大東亜共栄圏に賛同したわけではなく、インド独立の手段として日本軍と共闘したと見た方が無難であろう」「生存帰国者は将校ばかりだったともいわれる³⁾」と書いている。

上記「真偽は不明だが」「ともいわれる」の辺りに、両者とも根拠があいまいである危うさが見て取れるが、特に「生存帰国者は将校ばかりだった」は明確に誤りである。それでも、専門書でこうした記述がまかり通るあたり、インパール作戦をめぐる言論空間の偏向を端的に示していよう。

一方で関口高史のように、資料や証言を精査して牟田口廉也の生涯を追いながら、陸軍組織の実態も明らかにしつつ、インパール作戦の成立過程や責任の所在に再考を迫る研究成果⁴も近年存在する。そうした中でインパール作戦について、それまで連戦連敗だったイギリス軍が、用意周到な準備を重ねてやっと日本軍に勝てたと立論されているのが、本書の特徴である。そして、「インパール作戦」という呼称自体が「どうしても日本側からの視点が主になってしまいがちという考えから」(20頁、以下ページ数は『完全版 インパールの戦い』による)、本書のタイトルも「インパールの戦い」となっている。

〈序章 かつての激戦地に立つて〉は、著者が実際にインド北東部マニプル州のインパールに赴いた経験と共に、インパール・コヒマの戦いが、イギリス国立陸軍博物館による企画で識者により「グレイテスト・バトル」に選ばれ、「東のスターリングラード」とさえ評されていることを知って、衝撃を受けた(12～13頁)ことから書き始められている。そして、従来のインパール作戦論について、英印軍やインド国民軍(INA)の存在が希薄に感じられるなど「議論の方向性や記述の内容がひどく内向き」であること、作戦期間として扱われるスパンが短いこと、「インド北東部」という場所とそこに住む人びとの存在があまり語られていない」ことを指摘し(14～16頁)、イギリス軍にとって「絶対に負けられない戦い」であったインパールの戦いでは、「準備」と「情報」が勝敗を決した(18～19頁)という本書の基本路線が示されている。

〈第一章 ビルマを巡る攻防〉ではまず、昭和17年(1942)4月にイギリス軍がビルマからインドへ撤退した時の様子が描かれている。この際にイギリス軍が越えた険峻なアラカン山系そして雨期の豪雨こそ、2年後に日本軍を苦しめることになるのは皮肉だが、著者は英印軍が完敗した理由を述べる。「日本軍の経験値の高さ」「南機関の役割」「英印軍の方は日本軍の進攻に対し十分な準備ができていなかったこと」「指揮命令系統もうまく機能しなかった」(32～34頁)を挙げるが、まさに「準備」と「情報」が勝敗を決したことが分かる。そして当時ベルリンにいたスパーズ・チャンドラ・ボースが日本行きを熱望するも、実際に東京に到着したのは日米戦争の戦局転換後の昭和18年5月16日であった(43～45頁)。この時間のロスも、インパール作戦にかけるボースの並々ならぬ熱意と無縁ではなからうと、読者は想像するかもしれない。

〈第二章 失われた機会——幻の「一九四二年インド北東部進攻作戦」〉では、日本軍によるビルマ制圧直後のインド北東部進攻作戦であった「二一号作戦」がなぜ頓挫したかについて、日英双方の資料から解き明かされている。日本軍の緒戦の快進撃にも関わらず日独伊の連携がとれず、また日本側も「長期不敗」態勢を固めたい陸軍と、さらなる攻勢に出ようとする海軍(55頁)の戦略上の合意が難しい状況にあった。

加えて著者はインド国内の反英世論や反英活動、さらに連合国がインドに留まってほしい蒋介石がイギリス・アメリカに働きかけるなど、日本軍の動向への予測が大きく国際関係にも影響を与えていたことを示唆する。日本陸軍の中では、「岩畔機関」の岩畔英雄大佐や南方軍参謀の林璋中佐などがインド進攻に積極的であったが、「二一号作戦」実施の当事者である第一五軍司令官の飯田祥二郎中將、さらに麾下の第一八師団長の牟田口中將は否定的であった(66～69頁)。根本的な問題として、「検討を行う際に基盤となる情報が十分になかった」(69頁)とのことで、日本軍では快進撃の最中も理知的な議論が行われていたのである。ただ一方で、二一号作戦中止により「英印軍としては図らずも窮

地を脱することができた」(85頁) ことになる。

〈第三章 インドを防衛し、ビルマを奪還せよ——英印軍の周到な準備〉では冒頭、「王冠に輝く宝石」インドが大英帝国にとっていかに重要かについて改めて強調されている(88～90頁)。さらにインド撤退後のイギリス軍は、「第一次アラカン作戦」(日本側呼称「第二次アキャブ作戦」)で再び日本軍に敗北した。本件について記された英国公刊戦史『対日戦』には、「自軍の猛攻を跳ね返した敵将として高く評価している」第五五師団長の古閑健中将の写真が掲載されており(93～94頁)、日英間の戦史に対する認識の違いが分かって興味深い。さて、英印軍の態勢立て直しと併せて、ここでは印緬国境のインド北東部の歴史について説明されている。歴史上のナガ丘陵へのイギリス軍の侵入に触れ、「一〇〇年にわたる「地の利」がイギリスにはあり、このことがインパールをめぐる戦いでも活かされていく」とする。さらに昭和17年4月から地元部族を組織化し訓練した「Vフォース」、そしてその募集に協力した女性人類学者アーシュラ・グラハム・パウワーの存在も紹介されている(112～115頁)。

〈第四章 チャンドラ・ボースの登場と光機関の情報活動〉では、インパール作戦のもう一人のキーパーソンであるチャンドラ・ボースに焦点が当てられる。従来インド人への不信感をもっていた東條英機首相を魅了したボースは、インド独立連盟(IIL)総裁とINA最高司令官に就任し、昭和18年10月21日に「自由インド仮政府」樹立を宣言した。この「政府」は絵空事ではなく、同年11月の大東亜会議で東條首相からアンダマン・ニコバル諸島の譲渡を取り付け、「領土」「国民」を獲得した(135頁)。一方で「日本軍の傀儡にはなりたくない」という意識もあり、INA・IILと岩畔機関の関係は必ずしも良好ではなかった(136頁)が、岩畔機関から改称した「光機関」は陸軍中野学校や東亜経済調査局附属研究所(大川塾)の出身者などを擁し、実はインパール作戦開始時には印緬国境の「大部の山間民族を懐柔し、我方に協力せしめ、作戦に必要な兵要地誌的調査も大略出来た」という(154頁)。こうした成果がインパール作戦発動の一つの背景にあるとすれば、情報戦の観点からも同作戦が単に「無謀な作戦」とはいえない複雑さを帯びてくる。

〈第五章 二人の将軍の「変心」——日・英印双方の作戦計画〉は、第一五軍司令官に昇格した牟田口中将と、英第一四軍司令官のスリム中将の変心(決断)を軸に、日本軍のインド進攻作戦が復活し確定してゆく過程を描く。昭和12年の「盧溝橋事件当時のコンビ」であった河邊正三中将(緬甸方面軍司令官)―牟田口中将という組み合わせが昭和18年3月に復活(161頁)したのち、牟田口は一転して「インドに進行することで戦局を変えられるはずだと強く信じるようになった」(164頁)。その背景として著者は、英印軍特殊部隊「チンディット」による破壊・攪乱工作のインパクトを見てとる(166～169頁)が、牟田口はチンドウィン河西岸に防衛線を前進させる「武号作戦」案、さらにインパール、アッサム進攻案を披露するに至る。「コンビ」の河邊司令官は曖昧なまま作戦を容認した格好だが、東條首相兼陸相の「浴槽問答」で認可された(177頁)。ここで筆者は、「東條が入浴中ではなく、執務室で作戦の疑問点を徹底的に問いただすことができる状況にあったとしたら、彼は首を縦に振ったのだろうか」という命題を挙げつつ、あえて確答を避けている。ただ、インド進攻を熱望するチャンドラ・ボースと利害一致したのは確かで、ボースはマニプル占領後、「現地の行政は自由インド仮政府が担当するべきだと主張」までしている(181頁)。一方の英印軍は「決定的な勝利」のため、日本軍への先制攻撃やチンドウィ

ン河渡河中の攻撃を避け、日本軍をインドに引き入れる選択をした(184～187頁)。

〈第六章 激突——日本軍、インド国民軍、英印軍の戦い〉では、昭和19年3月「ウ号作戦」(インパール作戦)発動後の戦闘の経過が詳述されている。序盤、日本軍は順調に作戦を進め、これはイギリス側も織り込み済みであったが、チン丘陵からの撤退のタイミングを誤り、また重要な拠点コヒマに進攻する日本軍の兵力を過小評価するという「過ち」を犯した(195～196頁)。そのため、コヒマでの戦いは予想をはるかに上回る「魔の一三日」と呼ばれるほどに苛烈をきわめた戦い」となったが、空からの補給に救われた(196～199頁)。そうした中で、日本軍の俘虜への尋問や鹵獲文書も、日本軍の作戦行動について重要な手掛かりをもたらした(203～208頁)。日本軍側では、コヒマから独断撤退した佐藤幸徳第三一師団長や、作戦中止を訴えた柳田元三第三三師団長が更迭され、病に倒れた山内正文第一五師団長は戦線を離れたため、「作戦に参加した三個師団すべてで師団長が交替するという異例の事態」となった(213～215頁)。

著者のいう従来の「内向き」な議論では、佐藤師団長の抗命ばかりがクローズアップされがちであるが、本書では踏み込んだ評価を避けているところにも客観性が認められる。さらにINAの戦闘についても取り上げたうえで、著者はこの戦いを「日英インテリジェンス対決」すなわち特務機関同士の戦いとも位置づけ、この「ジャパン・ラン(日本戦争)」が現地関係者のその後の人生にも多大な影響を及ぼしたことを指摘している(219～227頁)。「白骨街道」など日本軍の惨状を述べつつ、イギリスの公刊戦史『対日戦』では1万6,667人も戦死者を出したとされる、英印軍の多大な被害にも目を向けている(235～237頁)。

〈終章「インパールの戦い」とは何だったのか〉は、作戦後の敗戦までの経過を端的に記したうえで、戦いの総括を試みている。日英両軍の目的の違いから、「準備」と「情報活動」にかけたエネルギーも段違いだった」とし、かつそれがビルマ制圧以降の2年間で逆転したという論点が、改めて提示されている(242～244頁)。そして初戦の勝利により皮肉にも、「植民地軍としての英軍に対する侮り」が牟田口のみならず、日本軍全体にあった可能性を指摘している(246～249頁)。そして本書で取り上げるスリムの最後の誤算として、日本軍の強さを支える「日本軍兵士の強靱さ」を取り上げる(253～254頁)ことで、本論を締めくくっている。

〈新章 勝って兜の緒を締めよ——英国保管文書が示す「資料戦」〉では、『インパールの戦い——ほんとうに「愚戦」だったのか—』発刊後に、著者がイギリス公文書館で発見した日本軍将兵の日記や手帳の内容を踏まえ、加筆された章である。たとえば「医務将校の日記」からは、作戦開始後に4月3日の神武天皇祭が行われているような「余裕がある様子」から、日を追うごとに状況が悪化していることが見て取れる(259～265頁)。これに関連して両軍の医療態勢の違い(日本軍の貧弱さ)も改めて明らかとなったほか、旧日本軍幹部が参加した「在ビルマ英軍司令官と在ビルマ日本軍司令官の会議のための質問表」(本質問表に対する回答資料は著者も未確認)は、インパールの戦いに対するイギリス側の本来の問題意識が確認されるものである。また、ビルマでの平時における日本人の「戦友日記」だけでなく、コヒマ博物館には戦時の「遺言書」も所蔵されており(283～289頁)、戦後日本とまた違った資料収集および展示の様相から、大東亜戦争をめぐる「情報戦」がまだ続いているようだとの思いを、読者も禁じ得ないであろう。

イギリス・インド側の資料を駆使した本書を通して、「インパールの戦い」が決して“日本軍が無謀な作戦を行って勝手に自滅した”のではなく、長期間の情報戦を経て生じた国際戦争であったことが、改めて世に問われている。従来の関連書籍で紙幅が割かれがちであった牟田口廉也中將への人格的評価や、佐藤幸徳中將の抗命撤退についての評価を避けて、資料や有用な証言にもとづき事実関係淡々と記されていることも、本書の客観性を高めているのではないだろうか。

そのうえで、評者の更なる問題意識がかき立てられた点を以下に記したい。第二次世界大戦後のアジア諸国独立の出発点と位置付けられることもある⁵大東亜会議について、本書ではオブザーバーであったチャンドラ・ボースやI N A・I I Lを主要アクターとして、インパール作戦との関係が描かれているが、国際関係として見た場合に、大東亜会議や大東亜共同宣言そのものがインパール作戦（に代表される積極作戦）を後押しした、あるいはイギリス側の反撃準備を加速させた側面はなかったのか。

また、チャンドラ・ボースについては、軟禁されていたカルカッタを脱出して「当初ソ連に行くことを希望して」（41頁）いたこと、東條英機首相も当初「共産主義に傾倒しているのではないか」（129頁）と疑っていたこと、さらに終戦後「満洲・ソ連国境まで行き、ソ連軍と接触しようと考えて」（252頁）立ち寄った台北で事故死したことが、本書でも述べられているが、もしいずれかのタイミングでソ連行きに成功していれば、その後のインド独立運動はどのような展開を見せたであろうか。

そしてイギリスにとっては、インパール・コヒマの戦いで多大な犠牲を払ってインドを防衛し、ビルマを奪還したにもかかわらず、「戦勝からわずか三年以内に両国ともイギリスから独立した」「被支配国の民衆が無条件にイギリスを支持したわけではなかった」（250頁）と著者が指摘している通りで、そうした意味でインドやビルマの民衆も、“日英に国土を蹂躪された被害者”というだけでなく、両列強の狭間で力強く生き抜いたという側面が浮かび上がる。このような評価について、「侵略戦争正当化」といったレッテル貼りを避けつつ、実質的な議論を今後展開するためにも、インパール作戦ひいては大東亜戦争についての議論の際には、本書の研究成果が基本的な土台となることを願っている。

（文春新書、令和8年）

注

- 1 保阪正康『昭和陸軍の研究 下』朝日文庫、令和7年8月（初刊は平成11年）234～235頁。
- 2 堀本武功『物語 インドの歴史』中公新書、令和8年6月、215頁。
- 3 同上、216頁。
- 4 関口高史『牟田口廉也とインパール作戦—日本陸軍「無責任の総和」を問う—』光文社新書、令和4年。
- 5 たとえば深田祐介『大東亜会議の真実—アジアの解放と独立を目指して—』PHP新書、平成16年など。